サッカーに暴力も暴言もいらない

サッカーの指導現場における暴力根絶に向けてのディスカッション

平成 26 年 9 月 27 日（土）　（一社）山梨県サッカー協会 4 種委員会　評議員会
山梨市民会館・大集会室

【コーディネーター】：横森潔キッズ部長

本年度、日本サッカー協会の大方針として「サッカーの指導現場における暴力根絶する」を掲げました。山梨県 4 種委員会としてこの問題に真摯に向き合っていくきっかけとなるディスカッションを実施する。

【パネラー】

甲府地区：内藤健美氏（池田 SSS）・ 許山敏氏（大国 01）

峡北地区：堀田充布氏（甘利 SSS）・ 佐藤大輔氏（VF 八ヶ岳）

峡中地区：渡辺一仁氏（玉穂 SSS）・ 諸貫務氏（CSC ルーデンス）

峡東地区：村松賢一氏（浅川 Jr ）・ 滝嶋和彦氏（塩山 SSS）

郡東地区：西島秀和氏（上野原アルテアル）・ 中野真紀夫氏（UFCDREAM）

郡南地区：高村富三人氏（山中湖 SC）・ 池田憲昭氏（FantasistaFC）　以上各地区推薦

リスペクト推進委員：風間斉峡東地区理事、内田淳峡中地区理事

【評議員会出席者　登録チーム指導者　79 名】

※プロジェクターを用い、グループワークと発表を重ねることで参加者が共通した認識を持つことができた。

参加者全員が「サッカー指導現場における今後一切の暴力を根絶する」宣言を行った。

「学校の部活動トップレベルまで、スポーツ指導での暴力の横行」

社会的な問題として取り上げられている

大阪の高校でバスケット部主将男子生徒が体罰を受けた後に自殺

柔道女子日本代表では、指導者の暴力とパワーハラスメントを選手 15 名が告発

大方針「サッカーの活動において、今後一切の暴力を根絶する」

指導現場での暴力を用いての指導をしない、させない、許さない。

暴言も暴力に含まれる

そもそもスポーツとは、「楽しみ」「解放」「爽快」で「自発に基づくもの」

多くのチャレンジから「成功と失敗」「挫折と達成感」

4 種年代の子どもたちに誰もが安心・安全にサッカー・スポーツを楽しむ環境を提供する。サッカー・スポーツの健全性を守り抜くことは、我々指導者である大人の責務！

スポーツ指導現場の暴力行為はなぜ起こるか（グループワーク）

指導者の感情

・熱意をもって指導に当たっている、感情的な強い表現が暴言ととらえられる（グループ）

指導したことを選手が実際にできない

・普段の練習や繰り返しの練習をしてもなかなかできないと強く指導してしまう（グループ）

選手の態度・姿勢など（反抗的な態度、集中しない）

・手っ取り早く子どもたちに同じ方向を向かせるために強く指導する傾向がある（パネラー）

好成績を上げなければならないというプレッシャー

・勝ちを意識することから自分の思い通りに動かない選手に強く当たってしまう（パネラー）

選手同士、先輩後輩の関係による悪しき習慣

・現在 40 歳～50 歳代の指導者は高校時代、当たり前のように試合中やハーフタイムに殴られるという経験がバックボーンとなっている。（パネラー）

日本人の精神風土、選手・保護者の中にも体罰を寛容に受け止める精神風土がある。「ときには体罰も必要」と考えている限りは、体罰はなくならない

体罰の問題点　相手に何が残る？（グループワーク）

「恐怖心」や「苦痛」　「不信」「恐れ」「恨み」

「屈辱感」「憎しみ」「怒り」

「羞恥心」「不安」「劣等感」「無力感」「逃避」

それは指導者が期待したことだったでしょうか？

体罰は、それをしている大人の感情のはけ口であることが多い

体罰は、恐怖感を与えることで子どもの言動をコントロールする方法である

・大会等、ある程度厳しい指導も必要だと思う（グループ）
・同じプレーのミスについて怒られると、失敗すると怒られるという恐怖心からプレーが委縮してしまうかもしれない。一方大人になって思い出すと、プレーができるようになったことは怒られたから出来るようになったと思える（パネラー）

体罰は、即効性があるので、他のしつけの方法がわからなくなる

体罰は、しばしばエスカレートする

・選手のレベルによってはいつまでも強い指導を受け続けることとなりエスカレートする心配がある

体罰は、それを見ているほかの子どもに深い心理的ダメージを与える

・暴力を浄化して受け入れることもあるが失うことも多い、4 種年代は受け入れることが出来ない年代であり、サッカー自体を嫌いになってしまうことが考えられる（パネラー）

体罰は、ときに取り返しのつかない事故を引き起こす

・幸いサッカー界では今のところないが、今後は可能性があると真剣に考える必要が有る。

暴力による指導、その結果相手の心に残るものは心身の傷

・いま指導者として考えると、サッカーが好きな選手は自身の努力で良い方向に考えていこうとする傾向があり、良い仲間と巡り合えて共有することができ救われる部分もあるかもしれない。しかし、現在指導を受けている子どもたちが同じようになると考えるのは間違っている。

何が暴力で何が暴言かは受けている側が思うことである

「しない・させない・許さない」未然に防ぐための方策（グループワーク）

・同一会場で暴言を目撃したとしたらどう対応するかはなかなか難しい（グループ）
・強い言葉による指導を試合中に耳にするが、選手にしっかりとした技術をトレーニングで積み上げてきているのか、そのうえで声掛けできているのか不審に思うことがある。指導力もつけてほしい（技術関係）
・指導者がチーム内で常に「勝つことが全てではない」と声掛けし、保護者にも理解してもらうように心がけている。チームの中で宣言することも必要（パネラー）
・指導者間で共通認識するように日頃から話すように心がける（パネラー）
・子どもたちが自分たちで考える場面、指導者も選手とともに考える指導では暴力や暴言は必要ない（パネラー）
・指導者も感情をコントロールして指導に当たる（パネラー）
・エクスキューズができる指導者同士のコミュニケーション雰囲気を醸成していく
・暴力の定義について共有してく必要が有る、行動や発言についてもそうだが、何が暴力で何が暴言かは受けている側が思うことであることを忘れてはならない
・セクハラも同様に受けた側が感じることである

良い連鎖を創り出し、閉鎖性を取り除く（自浄作用）

・一歩踏み込んで話をしていく
・話をできる関係を気づいていく

大方針「サッカーの活動において、今後一切の暴力を根絶する」宣言採択！

サッカー活動で暴力をしない、させない、許さない。「サッカーの指導現場において今後一切の暴力を根絶する」宣言を採択した！

サッカーの指導環境の改善（指導を受ける環境の改善）

「全チームへの指導者ライセンス保持者の１名以上配置」

「選手・指導者の適正人数の配置」

「全指導者がライセンス取得」

指導者を守ることにも繋がる

①メンター（mentor）制度

指導現場は時にクローズであり孤独

ライセンス取得はスタートであり、日々の指導活動で様々な疑問や悩みが生ずる

指導者に対し、すぐに相談できる信頼のおける相手が必要

②安心･安全担当者（Welfare officer）の配置

子どもの安心・安全の保証をする仕事をする人

子どもの安全保護の研修を受けた人材

該当団体や大会・リーグでの啓発・予防・問題への対応、窓口に寄せられた事例に対して連携して対応する。４７ＦＡ・各クラブに配置

大会での＜Welfare officer＞の対応例（委員長）

※全て「伝えた」ということで終るが、指導者がどう感じてどうしていくか、一つのきっかけになるようにということ。

・本人も自覚しているようだが、選手に対する発言が高圧的に受け取られること、過剰なコーチングであることを伝えた。「おめえ」「おい」など気になることを伝えた。

・選手に多少ネガティブなコーチングがあったので、ポジティブに選手に良いプレーについて褒めてあげるよう伝えた。

・一つ一つのプレーに指示が見られた、選手も煽る感じがあったので子どもたちの考えを引き出す声がけが大切ではないかと伝えた。

・支持と励ましの声がけのバランスを考えていただくとより良くなると思います。途中のレフェリングに対して我慢していたことには共感しました。

・敗戦でネガティブになっている選手にポジティブな声がけをしてあげてくださいと伝えた。コーチ陣もネガティブだった。

・子どもたちのプレーを褒めながら声をかけている子どもたちもスタッフの声に耳を傾け信頼している様子であると伝えた。

・ベンチワークもコーチングもポジティブで非常に良かったと伝えた。

山梨県４種委員会　フェアプレーへの取り組み（リスペクト推進委員）

・4 種のモラル、移籍、規約、暴力追放に関することなど様々な課題にたいしてリスペクト推進委員として取り組んでいくことになった。そんな中フェアプレー賞の選考についても取り組んできた。

U-12 リーグや 4 種大会におけるフェアプレー賞については、選手のプレーの中にあるフェアプレー、反則の有無、イエローカード有無だけではなく、ベンチのコーチングやチーム全体のマナー、保護者の応援の様子などを含めてフェアプレー賞を考えている。

・最近 10 年を見ていると少しずつだがリスペクトの精神も浸透してきていると感じる。取り組みを進めていくことで子どもたちにとって良い環境が整えられると思っている。

③健全育成クラブ基準

クラブの規範、ルールの設定

有資格指導者の配置

適正人数での指導

安心・安全に対する配慮

メディカルサポート体制

リスペクトの取り組み

制度化も必要かもしれないが、制度だけで解決する問題でもない

Players First

Respect

（資料１）

「家にいることも少なく、あまり会話もなかった父親が、私が万引きをしたときには、本気で怒ってくれて、張り倒されました。そのとき、私は父親の愛を強く感じて、二度と万引きをすることはありませんでした。」

「子どもって、親から注目してもらうこと、気にかけてもらうことを求めています。その時、父親の愛情を強く感じたのは、いつも気にかけてくれない父親が、本気であなたに向き合ってくれたからでしょ。あなたにとって重要なのは、張り倒してくれたことよりも、父親が本気であなたに向き合ってくれた、ということだったのではないですか。その真剣な向き合いは、体罰以外の方法ではできなかったのでしょうか。ほかの方法でも、父親の真剣さがあなたに伝われば、同じような愛情を感じたのではないでしょうか。」

「しつけと体罰」 森田ゆり著

（資料２）

「おやじの背中」 俳優の清水宏次郎さん・朝日新聞コラム

「一番の思い出は、怒鳴られた時でも、殴られた時でもありません。中三で家出して先輩の家でシンナーを吸ったことがあります。深夜、頭がボーっとしていたら、玄関がガラッとあいて、両親が入ってきたんです。おやじはひとこと「帰るぞ」。冷や汗が背中を伝いました。「絶対、殺される」と覚悟したんですが、その後、この件で叱られることはありませんでした。帰りの車中、無言で運転するおやじと、助手席に座った母のすすり泣き。これだけで効きました。力ずくだけでは、思いは伝えられない。人の親になって、そのことが痛いほどわかります。」

「しつけと体罰」 森田ゆり著

「いかに教えるかではなく　いかに納得させるかだ」　アーセン・ヴェンゲル

子は親の鏡　Children learn what they love　ドロシー・ロー・ノルト

批判ばかりされた　子どもは　非難することを　おぼえる
殴られて大きくなった　子どもは　力にたよることを　おぼえる
笑いものにされた　子どもは　ものを言わずにいることを　おぼえる
皮肉にさらされた　子どもは　鈍い良心の　もちぬしとなる
しかし、
激励を受けた　子どもは　自信を　おぼえる
寛容にであった　子どもは　忍耐を　おぼえる
賞賛を受けた　子どもは　評価を　おぼえる
フェアプレーを経験した　子どもは　公正を　おぼえる
友情を知る　子どもは　親切を　おぼえる
安心を経験した　子どもは　信頼を　おぼえる
可愛がられ　抱きしめられた　子どもは　世界中の愛情を　感じることを　おぼえる

報告者　広報部　鈴木和幸